岡山県立博物館だより

35号
1月5日
1991

「邪馬台国へのみち」

―― 平成2年度開館20周年記念特別展の開催にあたって ――

館長 橋本泰夫

岡山県立博物館では，平成2年度開館20周年記念特別展「邪馬台国へのみち」を本年2月9日から3月10日まで1か月間にわたり開催することになりました。

本館は昭和46年に開設され，以来20年間にわたり一貫して郷土岡山県に伝わる優れた文化遺産を展示して，輝かしい古代吉備国の伝統をひく本県の歴史と文化の紹介に努めてまいりました。

今回の記念特別展は，邪馬台国成立の過程をたどりながら弥生時代の日本列島の様相を出土資料や最近の研究成果を通して概観しようとするもので，本館の20周年を記念するにふさわしい催しものであると考えています。

ご承知のように弥生時代は，日本列島に水稲栽培が伝わり以来2000年にも及び我が国の社会・文化の基礎となった農耕社会が成立した時代でもあります。最初北九州で始まったとみられる稲作は，カロリーの高さ，貯蔵性に富む米の利点などから積極的な栽培技術の改善，向上がみられ，弥生時代中葉には本州北部にまで及んでいきます。

こうした農耕の発達は，食料の安定自給，定住生活などを背景に飛躍的な生活の安定向上をもたらしましたが，一方では耕作の共同体化などから集落が生まれ，さらには部族国家が構成され，収穫物，生産手段などの帰すうをめぐって政治的な緊張が生じるようになりました。

この当時の状況は，考古学上の資料でしか分かりませんが，佐賀県吉野ケ里遺跡では物見やぐらや二重の壕，柵をめぐらすなど抗争に備えた当時の国の様子がしのばれます。また，中国の史書「前漢書地理志」に「楽浪海中倭人有り，分かれて百余国と為す」とありますが，その後3世紀なかばに書かれた「魏志倭人伝」には，倭国に大乱があり数年間続いたとあり，国の数も30余国と誌され，初期段階の国家群が抗争をくり返しながら連合体を結成しその盟主国が邪馬台国であったと考えられています。

「魏志倭人伝」には3世紀はじめから後半にかけての日本列島の様子がくわしく誌されていますが，編者の実見ではなく文献や聞き書きによった部分もあり全てが事実かどうか疑問視されています。特に邪馬台国の所在地については，江戸時代からさまざまな研究がなされており，現在では北九州説，畿内説と大きく2つに分かれております。こうしたこともふまえて，本展覧会では所在地論には直接ふれず，関連する資料等でもって邪馬台国にいたる歴史の流れを明らかにすることに努めました。

弥生時代は，農耕社会の受入れから，統一国家への始まりなど縄文時代に較べて非常に早い速度で時代が進展していますが，現在の我が国も地球規模のうねりのなかで農業社会から工業化社会へ，さらには情報化社会へと変ぼうを遂げ，私たちの生活も大きく変わってきています。それだけにこの展覧会によって，東アジア地域の厳しい国際情勢のなかで，現在につながる統一国家への胎動をはじめた弥生時代なかばから後半にかけての日本列島の様相に思いをはせていただければ幸いであります。

終わりになりましたが，今回の展覧会への出品をこころよく御承諾くださいました所蔵者の方々をはじめ，御協力を賜りました皆様に心から御礼を申しあげます。

おってこの20周年を契機に，博物館活動の一層の充実・活発化に努め，県民の方々の学習要望に的確に対応していきたいと考えております。これまでの県民の方々をはじめ関係機関の皆様の御指導，御協力に深謝するとともに，今後ひきつづきよろしくお願いする次第でございます。

飛禽鏡
総社市宮山遺跡
本館蔵

平成2年度開館20周年記念特別展

「邪馬台国へのみち」

2．9～3．10

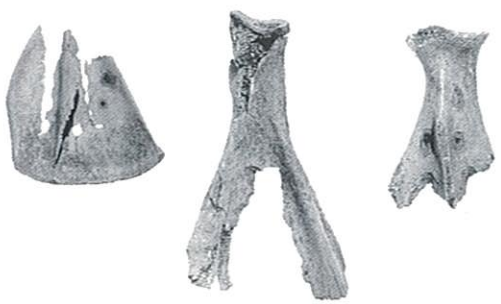
日本の歴史上の事件で，邪馬台国と女王卑弥呼についての謎ほどに，多くの人々の関心を集めているものはない。中国の正史に記されている邪馬台国にまつわる記事の大半は，明らかに史実であると考えなければならない。そこにこの問題をめぐる課題の重要性があり，古くから論争が繰り返されながらも，なお多くの学者を引きつけてきた内容の重さがある。

この時代は，日本に原始社会の組織とは異質な，政治的な組織が形成され始めると考えられている時代であり，邪馬台国の正確な規模や，構成を明らかにすることは，日本歴史の解明にとって極めて重要な意味を持つものである。

ことに邪馬台国については，歴史学者の間で所在地に関する論争が繰り広げられたことが，一般の関心を更に高めてきたと言えよう。この論争は，単に邪馬台国の所在地がどこであるかと言うものではない。所在地が九州か畿内大和かと言うことは，取りも直さず一口に言うならば，邪馬台国の姿を九州地方に限定したものとして理解しようとするのか，畿内大和政権の初現期の姿として理解しようとするかにかかっている。

魏志に描かれた倭国の状況は，それぞれが国と呼ばれているように地縁的に組織された部族の間で，同盟，服属，抗争にせめぎあう姿を伝えているものである。これが畿内大和を中心として北九州から壱岐，対馬におよぶ広い地域にわたる大規模な動きであるのか，せいぜい九州地方にとどまるものであるのかは，以後の歴史的展開を考える上で重大な岐路ともなるものである。

女王卑弥呼が，宮室や城柵をもうけ，常に守兵に守られている姿。邸閣を設けて租賦を徴し，交易を監督する制度。諸国（各地の部族）を検察する一大率（監督機関）を置いて監理する体制。これらの内には，発展した国家に住む中国人の眼から見た誤解を含んでいるとしても，邪馬台国を



ト骨　岡山市加茂遺跡　古代吉備文化財センター

金 印
福岡市志賀島出土

頂点とする諸国の結合が，すでに原始社会の諸制度から逸脱していることを示している。こうした社会の状態は，原始社会から古代国家にいたる過渡的な社会の姿と考えられるものであり，古代国家の形成に向かう激動の時代を迎えていたことを物語るものにほかならない。

魏志をひもとくと，邪馬台国に至る道筋が記述されており，正確にこの道をたどれば，その所在地にたどり着くことができるように感じられる。事実，対馬，壱岐から北九州の諸国については，ほとんど問題なく解釈することができるのである。しかし，この地域から邪馬台国に向けての道筋となると，諸説は分かれて謎は深まるばかりである。

邪馬台国九州説を支えているのは，大陸文化に接する門戸として弥生時代の北部九州に展開した豊かな遺跡と，豊富な優れた遺物である。先年，発掘調査されて大きな話題をよんだ佐賀県吉野ケ里遺跡を始め，福岡県から佐賀県に至る地域には，弥生時代の優れた文化遺産が豊富に遺されている。

この地域の遺跡からは，しばしば銅剣，銅矛などの鋳型が出土することから，青銅器の鋳造が行われていたことが明らかである。畿内系の銅鐸とは異なるが，銅鐸の鋳造も行われていた。青銅器の鋳造には，大陸からの地金の入手はもとより，鋳型の製作，木炭の製造，鞴をそなえた炉の設備を作る技術など，一定の経済的基盤に裏付けられた技術体系が必要である。この地域が日本文化の中でも先進地域として，文化的にも，経済的にも先頭に立っていたことは疑いない。

建武中元2年（西暦57年）には，はやくも倭の奴国（博多付近と推定されている）が後漢の光武帝に朝貢しており，中国の王朝との関係を経験している。大乱の果てに出現する邪馬台国の成立が，経済的にも，政治的にも原始社会の発展と矛盾の激化の結果として現れたものであるとするならば，先進地域であった九州地方には，他の地域に先駆けてその条件が成熟するものと考えられる。

一方，邪馬台国畿内大和説では，女王卑弥呼が魏から下賜された100面にのぼる銅鏡の行方を問題にする。景初2(3か）年（238年）卑弥呼の朝貢に対して，魏から送られた銅鏡は正始元年（240年）に卑弥呼の手元にとどけられている。この時に一緒に送られた大刀2振に比較して100面という鏡の数の多さは，この鏡が卑弥呼に送るために特別に製作されたものであることを想像させる。問題となるのは，このときに魏から邪馬台国に与えられた鏡がどんな鏡であ

り，どこの遺跡から発見されているか。それは取りも直さず邪馬台国の位置を考える重要な証拠となるだろう。

この鏡が初期の古墳から大量に発見されている三角縁神獣鏡であると推定されている。三角縁神獣鏡については，いくつかの異論があり，問題を孕んだものであることは事実であるが，この鏡を除いて魏代の鏡で日本から大量に発見される鏡はない。事実，この鏡の中には景初3年（239年）や正始元年（240年）の銘を持つものもあり，卑弥呼朝貢の年代に一致するものである。

初期の古墳から大量に出土している三角縁神獣鏡の中に，女王卑弥呼の鏡が含まれていることは否定できないだろう。三角縁神獣鏡には同笵鏡と呼ばれている同じ鋳型か，同じ原型から作られた数面の鏡が知られている。この同笵鏡は，多くの場合，全国各地の古墳に分散して出土しているのであるが，この分散の情況の分析から畿内の椿井大塚山古墳に副葬されていた多数の三角縁神獣鏡が，分散する元となる鏡の集積の姿をとどめていることが明らかにされている。

卑弥呼の鏡を大量に保有し，全国に配布したと推定される人物が，大和ではなくて京都府下の山城南部にある椿井大塚山古墳に葬られていることは，新たな謎を生むものである。しかし，このことは邪馬台国の女王卑弥呼が入手した鏡が，その後，畿内から全国に分与されていったことを示すものであり，邪馬台国の所在地を推定する上で重要な手掛かりとなるものである。

遺跡，遺物の上からみて，この時代に重要な役割を果たしていた地域としては吉備地方の動向を見ないわけにはゆかない。

特殊器台　総社市宮山遺跡　本館蔵

弥生時代の終わり頃，邪馬台国の時代より少し前の時代に吉備地方に新しい現象が現れる。この現象は，特殊器台と呼んでいる特異な大形器台を中心として，首長に対する特別の送葬儀礼が成立することと，主要な首長のための巨大な墳墓の築造である。大形の墳墓の築造は，吉備地方だけでなく形態は異なっているが山陰地方にわたって広く展開している現象である。この首長墓の形成こそ，特殊器台の出現と合わせて古墳時代をひらく基礎となるものであり，他の地域には現れていない注目される動きである。

三角縁神獣鏡
備前車塚古墳
出土

東京国立
博物館蔵

特殊器台が使用されることは，部族の首長権が継承される権限となり，特別に重要な意味を持ったことを示すものであり，首長権が強大化したことを物語っている。また，特殊器台が土器の形態の違った地域にまでも，全く同一のものが分布している状況から，その行事が単位部族のものでなく，連合した部族全体のものとして行われていたと推定されるのである。このような連合体の発展と首長権の卓越する姿は，国々に分かれて世々王ありとして魏志倭人伝に描かれた，邪馬台国諸国の在方と同じ姿である。

次の時代になると，吉備地方で使用されていた特殊器台が，突然，大和を始めとする畿内地域に出現する。しかも，大和の中でも最古の時代の大形古墳を中心として展開するのである。橿原市弁天塚で発見された特殊器台は，この内でも最も古い形態であり，巨大な前方後円墳である箸墓と並んで大和での初期の形態を示す資料である。

ことに卑弥呼の鏡三角縁神獣鏡を出土する畿内大和の古墳時代初頭の古墳には，強く吉備地方からの影響がうかがわれる。それは単に影響があるという以上のものであり，むしろ古墳という墓制そのものが極めて吉備的な様相を示すのである。このことは古墳時代と呼ばれる時代を象徴する大形古墳の形成されるなかで，政治的にも吉備地方の動向が大きな比重を占めていたことを物語るものである。

この展覧会では，邪馬台国九州説の根源となる弥生時代の青銅器など北部九州から発見される優れた遺物，椿井大塚山古墳出土の鏡や景初3年銘の鏡など卑弥呼の鏡を中心として展示し，邪馬台国に至る歴史的な発展のあとをたずねるとともに，邪馬台国の所在地についても現在の考古学の到達点を理解して頂くものです。

卑弥呼の時代である3世紀は，日本歴史の中でも激動の時代であり，解明されていない多くの謎をのこしている。この謎こそ1800年をへだてた時代に，わたしたちの夢をさそうものであり，ロマンに満ちた夢を通じて歴史への親しみを培ってくれるだろう。

（副館長　高橋　護）

主要な展示資料

◎重要文化財

名　称	出土地	所蔵者
袈裟襷銅鐸	岡山市安仁神社	安仁神社
卜骨	岡山市加茂遺跡	古代吉備文化財センター
磨製石鏃	岡山市百間川	〃
銅鐸	岡山県勝央町植月	津山郷土博物館
旋帯文石〔レプリカ〕	倉敷市日畑	岡山県立博物館
弧帯石〔レプリカ〕	岡山県倉敷市日畑楯築遺跡	〃
平形銅剣	倉敷市由加	蓮台寺
細型銅剣	〃	〃
特殊器台	総社市三輪柳坪	個　人
特殊器台	総社市三輪宮山遺跡	岡山県立博物館
飛禽鏡	〃	〃
鉄剣	〃	〃
鉄鏃	〃	〃
特殊器台破片	一括　〃	〃
鶴山丸山古墳出土遺物	一括　備前市畠田	東京国立博物館
三角縁神獣鏡	2面　岡山市備前車塚古墳	〃
特殊器台	岡山県落合町	落合町教育委員会
中山遺跡出土土器	一括　岡山県落合町中山遺跡	〃
絵図遺跡出土土器	一括　岡山市絵図	ノートルダム清心女子大学
流水文銅鐸	岡山市高塚	古代吉備文化財センター
貨泉	25枚　〃	〃
重弧文土器	熊本県下山西遺跡	熊本県教育委員会
◎台付舟形土器	熊本県城南町宮地	個　人
重弧文土器	熊本県二子塚遺跡	熊本県教育委員会
絵画文銅鐸〔レプリカ〕	神戸市桜ケ丘	神戸市立博物館
細形銅剣〔レプリカ〕	佐賀県吉野ケ里遺跡	佐賀県教育委員会
把頭飾〔レプリカ〕	〃	〃
ガラス製管玉〔レプリカ〕	〃	〃
巴形銅器鋳型〔レプリカ〕	〃	〃
不明青銅器鋳型〔レプリカ〕	〃	〃
銅剣鋳型〔レプリカ〕	〃	〃
銅鉾鋳型〔レプリカ〕	〃	〃
鉄斧〔レプリカ〕	〃	〃
鉄鏃〔レプリカ〕	〃	〃
刀子〔レプリカ〕	〃	〃
鉄やりがんな〔レプリカ〕	〃	〃
鉄鎌〔レプリカ〕	〃	〃
鉄鋤先〔レプリカ〕	〃	〃
素環頭刀子〔レプリカ〕	〃	〃
鉄剣〔レプリカ〕	〃	〃
ゴホウラ貝製腕輪〔レプリカ〕	吉野ケ里遺跡	佐賀県教育委員会
イモ貝製腕輪〔レプリカ〕	〃	〃
有柄把頭飾銅剣〔レプリカ〕	〃	〃
細形銅剣	佐賀市鍋島本村	佐賀市教育委員会
土器	佐賀県諸富町村中角	諸富町教育委員会
銅釦	佐賀県小城町布施ケ里	小城町教育委員会
銀指輪	佐賀県大和町惣座	大和町教育委員会
ガラス玉	7000個　〃	〃
器台	佐賀県中原町原古賀三本谷	中原町教育委員会
◎中広銅鉾	3口　佐賀県北茂安町検見谷	文化庁
祭祀土器	一括　佐賀県利田柳	佐賀県教育委員会
銅戈	福岡県築上郡内	福岡市博物館
◎鋳型	福岡県原山町三雲遺跡	九州大学
中期甕棺	福岡市	福岡市
後期甕棺	福岡市	〃
金印〔レプリカ〕	福岡市志賀島	九州歴史資料館
特殊器台	橿原市葛本町弁天塚	橿原考古学研究所
◎家形飾り環頭太刀	天理市東大寺山古墳	文化庁
◎鍬形石	6個　〃	〃
◎車輪石	10個　〃	〃
木製短甲	浜松市伊場遺跡	浜松市立博物館
三角縁神獣鏡	12面　京都府山城町椿井大塚山古墳	京都大学
◎景初四年銘盤龍鏡	福知山市天田広峰15号墳	福知山市教育委員会
土器	一括　赤穂市原田中遺跡	赤穂市教育委員会
◎景初三年銘三角縁神獣鏡	島根県神原神社古墳	文化庁
◎銅剣	10口　島根県斐川町荒神谷遺跡	〃
特殊器台	広島県御調町貝ケ原	御調町教育委員会
特殊器台・特殊壷	三次市松ケ迫遺跡	みよし風土記丘資料館

記念講演会

日時：2月16日（土）13：30〜15：30
場所：岡山県立博物館講堂
講師：日本考古学協会会長・明治大学教授
　　大塚初重　氏
演題：「考古学からみた邪馬台国」

岡山県立博物館だより　No.35

発行日　平成3年1月5日
発行者　岡山県立博物館
　　館長　橋本泰夫
　　岡山市後楽園1−5
　　☎(岡山)72−1149